

バージンロード
処刑少女の生きる道 外伝

ベールダウン
—時計少女の廻り道—

グリザリカにて

作者：佐藤真登

掃圖：zArctander

録入：夜夜

『導力：接続（条件・了）——不正定着・純粹概念【時】——解除【回帰：記憶・魂・精神】』

「……ん」

満天の星が輝く空の下。取り戻した記憶にアカリは身を起こした。

夜だというのに、うっすらと影ができています。空に輝く砂を敷き詰めているかのようによく星が輝いている。日本では——少なくともアカリが住んでいた都会では見ることができない夜空だ。

記憶を取り戻すと、毎回、そこ直後に少し混乱してしまう。ここはどこだと、自分の記憶を探ると、すぐにつじつまが合った。

「ああ……そっか。砂漠に入る前、かな」

頭を押さえて、ふわぁっとあくびをする。就寝していたこともあって、メノウが付けてくれた花飾りがあしらわれたカチューシャは外してある。

いまは港町のリベールを出て、さらに国内を移動して次の未開拓領域にさしかかったところだ。メノウは傍にいない。危険な生物や魔導兵がいないか哨戒に出ているのだ。

アカリは自分の記憶の封印にいくつか条件を付けている。普段は【世界回帰】で経験した記憶を【回帰】の魔導で封印しているが、周りにメノウがおらず、いままでくりかえした時間軸と明確に違う出来事に遭遇した場合、アカリは一時的に記憶を取り戻すことにしている。

世界ごと回帰する条件は、たった一つ。メノウが死亡することだ。

メノウの死亡をアカリが認識した時点で、世界の【時】を回帰させている。させている、というよりも、【時】の純粹概念がアカリの願望をかなえるために、自動的に発動してしまうのだ。

アカリの目的はメノウに自分を殺させることだ。より正確に言えば、メノウが処刑人としての任務を遂行してアカリを殺し、彼女を生き延びさせることである。

メノウはアカリの目の前で何度も死んでいる。

まるで、それが運命だと言わんばかりに、何度も、何度も、何度もだ。

「……」

いままでのメノウの死を思い出して、アカリはきゅっと下唇を噛む。

グリザリカの王城でメノウと出会ってから、聖地にたどり着くまで三か月あまり。そこ期間アカリがメノウと一緒に旅をすると、アカリに情を移してしまったメノウは、処刑対象であるアカリを殺せなくなってしまう。それどころか禁忌であるアカリを助けるためにメノウが行動して——彼女の師匠にして史上最多の禁忌狩り『陽炎』に殺害されることになる。

「本当に騙されたまま一緒に旅すると……メノウちゃん、わたしのことを助けちゃうんだもん」

それが、最初の旅の結末。聖地にたどり着き、『塩の剣』まで至りながらもメノウがアカリを助けようとして、マスター フレア 導師『陽炎』に殺してしまった、忘れように忘れたれない思い出だ。

特にメノウが ファウスト 第一身分を裏切ってもアカリを助けると決意してしまった場合、赤黒い髪の神官『陽炎』フレアが現れる。処刑人の背信は禁忌だと告げてメノウを殺しに来る彼女から逃れられたことは、一度もない。

ならばメノウと出会うのがそもそも悪いのだと、アカリは召喚された直後にグリザリカの王城を脱出したこともあった。その時に至っては、アカリが一人で逃げている間にメノウが古都ガラムで大司教オーウェルに捕らえられて死亡してしまうという事態となった。

アカリとともに旅をすることでメノウが背信者となって ^{マスター フレア} 導師『陽炎』に殺されてしまう結末が待っているのに、アカリがいなければメノウが難局を乗り越えずに死亡してしまう事件が複数あるのだ。

アカリがいることで引き起こされるメノウの死の要因と、アカリがいないことでメノウが助かることになる要因。二つの要素が複雑怪奇に絡まって、アカリが幾度も繰り返しながらもメノウを助けられない結末をもたらしている。

何度も同じ時間を回帰させた結果、最初の何も知らなかった頃の自分がメノウに同行した旅が、もっとも長い時間メノウと一緒にいられた。同時にアカリを殺させる刃——『塩の剣』に一番近づけた旅でもあった。

だからアカリは、自分の記憶を【時】の純粹概念で封印している。それでいて記憶を封印した自分にメノウへの好感度と既視感を残しているのは、彼女から怪しまれるためだ。

アカリが【時】の純粹概念で時間のループを繰り返していることをメノウが悟れば、彼女は警戒心を失わないままアカリに接するようになる。

その警戒心があれば、メノウがアカリに完全に情を移しきることはないはずだ。アカリを殺せるままの心で聖地にたどり着き、メノウは ^{ファウスト} 第一身分を裏切ることなく純粹概念すら討滅可能な『塩の剣』を振ることができる。

そうすれば、メノウが死ぬ要因は消えてなくなる。

メノウに死をもたらす幾多の事件を切り抜けて、最後にアカリを助けないことで、メノウの人生は続く。

「だから、ちゃんとわたしを殺してね、メノウちゃん」

いまの自分になる前の最初の自分は、どんなのだったのか。

アカリはそっと目を閉じて、まだ残る記憶を回想した。

*

グリザリカ王国、王都。

町はずれの教会から町の中心地へと、少女といえる年頃の神官が歩いていた。

処刑人の神官、メノウである。

グリザリカ王国は大陸東部に位置する、国家の中でも最大級の大国だ。多くの人が住まう街並みは、夜中でも絶えることのない導力光に満ちている。彼女が藍色の神官服を着ているということもあって、怪しむ視線は皆無だ。通行人の視線集まっているのは、彼女の美しさゆえである。

大通りを一人で歩いていたメノウは、ふっと肩を落とす。

「モモとはぐれちゃったわね」

いまは異世界人である黒髪の少女をグリザリカ王城から連れ出した、翌日の夜だ。本来なら今日のうちに王都を出てしまうつもりだったのだが、トラブルがあり列車に乗り損ねてしまったのだ。

モモはメノウが乗り損ねた列車に乗車していたため、先にガルムに向かう流れになった。教典による導力通信がつながる距離でもないため、連絡もつかない。モモのバックアップは望めない状況だ。

メノウが一人であるというだけなら、グリザリカ国内で孤立しようとなんの問題もない。彼女は処刑人として様々な訓練を受けている。どのような場所にいようとも、単独行動は可能だ。

だが、いまのメノウは一人ではない。

連れの顔を思い出し、憂い気な表情になる。昨日の夜に接触した連れこそがメノウ

の不安要素のものだ。

不安をあらわにしたのは、つかの間のことだった。メノウはすぐに表情を平静なものにする。

大通りを曲がり路地裏にある宿に到着する。いつもメノウが一人で使うものより、ワンランクは上げてある。

メノウが部屋の扉をノックすると、中で人の動く気配がした。

がらやり、と扉を開く。

「お、おかえり、なさい」

扉を開いたのは、少し癖っ毛気味の黒髪の少女だ。彼女は小動物のようなおどおどした態度でメノウを迎える。

「あの……列車に乗れなくて、ごめんね。わたしのせい、だよね」

「気にしなくていいのよ」

相手を安心させるための笑顔を浮かべたメノウは、申し訳なさそうにしている彼女の名前を呼ぶ。

「ね、アカリ」

トキトウ・アカリ。

無害に見える目の前の少女こそが、処刑人であるメノウがグリザリカ王国を訪ねることになった原因だ。異世界である日本から召喚された『迷い人』にして、純粹概念を魂に宿すことになった少女は、禁忌を狩る処刑人のメノウにとって排除する対象である。

実際、メノウは王城で接触した時に一度、アカリを殺している。だが【時】の純粹概念を魂に宿していた彼女を殺しきることができなかった。

彼女は死亡すると同時に【回帰】の魔導で蘇るという、殺しても死なない力を持つ

ていたのだ。

彼女の力を目の当たりにしたメノウは予定を変更してアカリを王城から連れ出し、
拠点にしていた廃教会で一泊。この国の^{ファウスト}第一身分を治める立場のオーウェル大司教
に連絡を入れた。知見ある彼女から、どのような純粹概念でも滅することができる儀
式場があるという話を聞くことができたため、古都ガルムへの移動を決めた。

だが翌日、異世界に来たばかりで動転するアカリが出立の準備にまごついたため、
古都ガルムに向かう列車に乗り損ねてしまった。

「あなたのことを考慮できなかった私が悪いの」

「そんなこと、ないよ。えっと……」

心なしか身を縮めた少女が、上目遣いになる。戸惑いとためらいを見せながらも、
アカリが口を開いた。

「メノウさん、でいいんだよね」

「ええ、もっと気軽に呼んでくれてもいいのよ。年も近いし、『メノウちゃん』と
かどうかしら？」

「……うう」

メノウが微笑みかけるが、アカリは逆に居心地を悪そうに肩を縮こまらせる。

人見知りなのか、メノウに対する困惑が感じられる。まだ出会ったばかりの他人を
警戒しているのもそうだが、どう接すればいいのかわからないといった様子だ。いま
名前を呼んだ声も、そわそわと落ち着きのなかったものだった。

しかし、いきなり異世界召喚なんていう事態に直面した少女の反応だと思えば不審
なものではない。寄る辺のない世界に強制的に呼び出されて、初対面の人間に連れま
わされているのだ。いくら友好的に接したとはいえ、そんな状況でいきなり心を開か
れたらメノウのほう警戒してしまう。

死なない純粹概念への対処法は、この国の大司教であるオーウェルから伝えられていた。アカリとは、古都カルムにあるという儀式場に連れて行くまでの数日の付き合いになる。禁忌の魔導を魂に宿す処刑対象とはいえ怪しまれないように友好的に接する必要があると、メノウは意識してフランクな台詞を続ける。

「シャワーを浴びて、寝ましょうか。どう？一緒に浴びる？」

「へ!?だ、大丈夫……だよ！」

いたずらっぽく告げると、アカリは顔を真っ赤にしてシャワー室に駆け込んだ。

少しして、シャワーの音がしはじめる。緊張を解くための冗談だったのだが、予想以上に初々しい反応だ。メノウは微苦笑してから、自分のやっていることを客観視して口元をゆがめる。

「……あんないい子でも」

殺さなければならない。

異世界人は、やがて純粹概念を暴走させる運命だ。召喚の際に魂に宿るあの力は、『迷い人』の意思に関係なく記憶を蝕み、精神を侵食する。

あの少女はこの世界の誰かに利用される前に殺さなければ、多くの被害を生む。

この国でも ^{ヒューマン・エラー} 人 災 という悲劇を回避するために、メノウはすでに一人の少年を殺している。アカリと一緒に召喚された【無】の純粹概念を魂に宿した彼のことを、メノウは名前を聞くこともせずに殺害した。

身勝手に召喚されて、わが身かわいさで殺される。人為的ではなく、自然現象としてこの国を訪れる真の意味での『迷い人』もいるが、どちらにしても処刑対象なのは変わらない。

彼ら、彼女らをメノウが殺すのは、徹頭徹尾この世界の人間の都合なのだ。

「やっぱり……私は、どうしようもない悪人ね」

メノウは自分の役目の息苦しさ、重い息を吐いた。

「……ふう」

この国で行なわれた禁忌、異世界召喚の対処に來た処刑人『^{フレア}陽炎の後継』との導力通信を切ったオーウェルは、重く息を吐いた。

テロリストに狙わせた列車に、^{フレア}『陽炎』の弟子は乗らなかった…グリザリカ王城から連れ出した『迷い人』の少女が原因で予定をずらし、明朝に出発する列車に乗るのだという。

当然、彼女がガラムに到着する日程も変化することになる。

「さて、どうしましょうかねえ……」

立て続けに起こった計画外の事態に、オーウェルはゆっくりと思案に沈む。

オーウェルはすでに七十年も半ばの老婆だ。年老いた思考に、かつての鋭敏さと果敢さはない。節々に巣食う痛みが、常に精神を蝕み、あらゆる感覚を鈍化させている。

七十年を超す彼女の人生は晩年を迎えている。老いたという自覚は、とっくの昔に悲観から諦観に変わっている。力も、知恵も、勇気も、すべてが全盛期には及ばない。

「あの子の予定がズレたことには、どんな意味があるかしら」

目下の思考はそこに絞られている。

オーウェルは、メノウに『異世界人を抹殺するための儀式場がある』と誘いをかけて罫を張った。それは半分真実であり、半分は嘘だ。オーウェルの擁する【漂白】の魔導陣を使えば、どのような純粹概念を持つ異世界人であれども、魂を塗りつぶすことができる。

だが、【時】の純粹概念をただ死亡させるような真似はしない。なにせ【回帰】の魔導を行使できるというのだ。

時間をさかのぼる魔導となれば、いまのオーウェルにとっては喉から手が出るほどに欲しい魔導である。

「私が裏で糸を引いて、^{ノブレス}第二身分に異世界人を召喚させて、テロリストの列車を襲撃させたのが見抜かれている……というのは、穿ちすぎね」

だからこそ慎重に策略を巡らせるのだ。

テロリストに列車を襲わせたのは、ガルムに向かってきているというアーシュナの意識をオーウェルから逸らしたかったからだ。本来ならば列車テロを起こした『^{フォース}第四』の対処をメノウたちとアーシュナの両方にやらせることで、アーシュナに処刑人という存在がいることを気づかせて、そちらに意識を向かせたかった。

メノウの出発がズレたことでその企みは空振りに終わったものの、いま頃テロリストたちが蜂起しているはずの列車に『^{フレア}陽炎』の弟子が乗り損ねたのは、偶然の可能性が高い。そう結論をだす。

「……」

オーウェルは受け取った情報を自分の計画に組み込むために、深く考えを巡らせる。失った若さの代わりに蓄積された経験が、泡沫のように頭の中ではじけて消えていく。オーウェルの七十年以上の人生で、こうすればこうなったという実体験が思考の手間を簡略化し結論を早めてくれる。

自然と保守的になり、時として思い込みにつながる危険性もある思考手段だが、オーウェルは主観と客観を切り分ける天眼がある。

『^{フォース}第四』のテロリストたちの手引き、原罪魔導のための生贄集め、その他もろもろ。『^{フレア}陽炎』の弟子が、オーウェルが手に染めている禁忌の全貌を掴んでいたとしたら、単独でオーウェルの庭である古都がるむに足を踏み入れようとするのではないはずだ。

大司教であるオーウェルが禁忌に堕ちていると気が付けば、弟子ではなく、必ず

フレア
『陽炎』本人がくる。

弟子をすて駒にして油断を誘うというのはいかにも『陽炎』がやりそうな手ではあるが、芸がない。あの『陽炎』ならば、そもそもオーウェルに気取らせるような手を打つはずがない。誰にも知られることのないまま、オーウェルの心臓に刃を突き刺す手段を取る。

ならばやはり『陽炎の後継』がオーウェルの企みを一つ回避したのは偶然なのだろう。

「でも、偶然と幸運ほど怖いものはないわ」

瑞々しいが潤れ、しわばかりが目立つようになった指で、こつこつと杖の頭を叩く。

彼女は偶然と幸運を過小評価しない。どちらも、人が成功するには必須のものからだ。逆をいえば、強者が転落する時は決まって不運に見舞われる。

この世界に不慣れな異世界人を連れているのだ。『陽炎』の弟子が優秀だとはいえ、予定通りに行動できないこともあるだろう。組み立てたスケジュール通りにこなせる者が優秀なのではなく、不慮に対応できる者こそが処刑人として優れているのだ。

その観点から見れば、メノウは非常に優秀だ。

イレギュラーな問題を受け止めて対処し報告も怠らない。この国に入ってから彼女の行動は、部下に持ちたいとオーウェルが感嘆するほど優れていた。

優秀すぎて、処刑人として怖さがまったく見えないほどに。

「畏には、とてもかけやすそう。『陽炎』と比べるまでもなく素直だわ。けれども……」

それでも、オーウェルのたくらみが一つ、外された。

たかが列車の乗車のズレ。対応すれば修正可能な範囲だが、すでに一手がずれてし

まったのも事実だ。慎重に慎重を重ねて悪いことはない。

魔導素材としてたぐいまれなる価値を持つ『陽炎の後継』と【時】の純粹概念は惜しい。二つが揃えば、オーウェルの悲願の一つは成就するのだ。

老いを克服して、己の全盛期を取り戻す。

グリザリカ王への餌として釣り上げた異世界人は、理想的な純粹概念を持っていた。

あまりにも都合が良すぎて、一つ不安要素で自制心が働くほどに。

もしもいま見えているメノウの素直さが計略だとするのならば、彼女はオーウェルの策略を見抜いている恐れすらある。

純粹概念を持つ異世界人を捕え、人格を漂白し、魔導制御の媒介として必要不可欠なメノウを取り込むことで純粹概念を振るうという目的を。

「どれだけ若くても、あれは『陽炎の後継』なのよね」

メノウのことをここまで警戒するのは彼女が『陽炎の後継』と呼ばれているからだ。オーウェルはほかの誰よりも『陽炎』の動きに用心していた。

この国はオーウェルの庭だ。オーウェルを禁忌と見抜いたところで、告発する先すら存在しない。

万全を調えたという自負が慢心へと変わり、隙になっていたのかもしれない。

「年甲斐もなく、目がくらんでいたわね」

己に語りかけて、自戒する。

今回の異世界召喚において、オーウェルの最大の目的はグリザリカという国そのものだ。第二身分の権威失墜のためグリザリカ王を異端審問にかけて公に裁かされることが計画の肝であり、異世界人は最初から切り捨ててるつもりだった。

国王が異端審問官に裁かされたことで、すでにオーウェルの企みは成功している。

ならば残りの要素は、事のついででしかない。『陽炎の後継』も【時】の純粹概念も、

望外の幸運ではある執着するべきではない。

「あまり、欲をかくものではないわね」

大陸西端にある聖地からもっと離れているため、『主』の影響力が低いという立地。

グリザリカという古代文明期から千年続く血族。東部未開拓領域『^{からく}絡^よ繰り世』と接しているという地理。これらが揃えば、^{フアウスト}第一身分の干渉を受け付けない完全独立国家を打ち立てることも可能だ。

若さを取り戻すのは、そのあとでいい。まだ自分の寿命は、十年は確実に続く。若返りはできずとも、数年前から生命の維持には成功していた。

ならば、やはりメノウとアカリの確保に関しては、うまくいけばいい程度にとどめるべきだろう。

「殿下の動きは……そうね。^{ノブレス}第二身分に見てもらいましょうか」

結論は出た。

オーウェルはまとめた考えを実行するために、部下を呼んで人を動かす準備を始めた。

古都ガルムに到着したアーシュナ・グリザリカは、旧王城の騎士詰め所で不貞腐れていた。

「あまりお気に病まれますね、アーシュナ殿下」

「……気にするなというのが、無理な話だ」

いつも豪放磊落なアーシュナらしくもなく、ぶすりとした返答だった。

アーシュナはテロリストが蜂起した王都発ガルム行きの列車に乗り合わせていながら、衝突事故を止めることができなかった。武装した集団自体は制圧したのだが、『原色理ノ赤石』を体内に仕込んでいたのを見逃していた。後部車両にいたテロリス

トの処理をしているうちに先頭車両で魔導兵が発生し、機関室にあった導力機関が暴走。魔導兵相手に手間取っているうちに加速を続けた列車が、途中駅に停車していた列車に追突する大惨事に陥った。

アーシュナ自身は追突の直前に導力強化で肉体の性能を上げて、その時に周囲にいた数人を抱えて列車から飛び降りることでほぼ無傷ですんだ。しかしアーシュナが助けた乗客の他は、少なからぬ死傷者が出てしまった。

自分の目の前で多数の犠牲者を出してしまった。あの時に飛び降りなければアーシュナといえども無事ではすまなかっただろうが、惨憺たる事故現場を思い出すだけで、彼女らしくもなく気が滅入ってしまう。

「私が列車を止める能力さえ持っていれば、起こらずにすんだ事故だ」

「万人を救う『主』が実在しないのと同じこと。一人ですべてをこなせるなど、ありませぬ。殿下は気負い過ぎですぞ」

「ははっ、敬虔な^{ファウスト}第一身分が聞いたら怒り出しそうな慰めだな」

事故現場に迎えに来た騎士長は、アーシュナの責任ではないと労わってくれていた。表向きの態度に不審な点はない。

だが、なにかが臭った。

「騎士長。ひとつ、尋ねたいことがあるのだが」

「なんですかな？」

「列車に襲撃したテロリストの身元はわかったのか？」

「この国の民ではなく、流れ者のようですね。『^{フォー}第四』の人員であることは確かですが、出身地まではまだ……。どうやら、未開拓領域で合流してからこの国に入り込んだようで、正確なところはつかめておりません」

「そうか」

「はい。まだ時間はかかります。殿下は、ゆっくりとお休みください」

やはり、受け答えに不自然なところはない。一礼して立ち去った騎士長を見送って、アーシュナは頬杖を突く。

王族であるアーシュナに対して、協力的で礼儀正しい対応だった。騎士として立場まで尊重して、情報を惜しみなく提供してくれる。ケチの付けようが一点もないほどだ。

だが、あまりにも協力的で親身過ぎる。

『世直し姫』と呼ばれているアーシュナだが、その奔放さゆえに、彼女のことを苦々しく思う人間も多い。特に^{ノブレス}第二身分の年長者には反感を抱かれることが多かった。

「この騎士長も、まずそうのタイプだったはずだが……」

グリザリか王家系の姫として、彼女は^{ノブレス}第二身分への顔も広い。着飾るのが趣味ということもあって、社交の類にはアーシュナも好んで顔を出していた。^{ノブレス}第二身分は血族社会だ。親族と知り合えば、多くの人となりを知れる噂は自然と耳に入る。

そもそも、自分の職分を侵されて良い気分になる治安維持部隊など存在はずがない。アーシュナは人の上に立つべく生まれて教育された^{ノブレス}第二身分のプライドの高さをよく知っている。アーシュナが王族とはいえ王都からやってきた彼女に協力的なほうがおかしいのだ。

情報を誘導されている。治安維持の長である騎士長直々、だ。

「と、なると」

一人になった部屋の窓から古都の街並みを見下ろす。導力灯の明かりに照らされ、夜にも活動する^{コモンズ}第三身分の人々の街並みが見える。

旧王城の最上階。ガラムがまだ王都だった五十年前には、王族が住んでいた場所だ。なるほど、王族であるアーシュナを案内するのにふさわしい一室である。

だが同時に別の意図も透けて見えた。

心にやましいものがある者は、無意識のうちに隠し事から人を遠ざけたがるものだ。

「調べるとしたら、やはり、地下か」

独り言を終えたアーシュナは立ち上がる。部屋から出ると、扉の前で警護していた騎士が、ぎょっとしつつも声をかけてくる。

「で、殿下、どちらに？」

まだ若い男性騎士の問いかけに、アーシュナは挑発的に笑う。

「風呂だ。ついてくるか？」

「い、いえッ、滅相ありません！」

生真面目な騎士が直立不動になって返答した十分後。

アーシュナが古城から姿を消したという報告が、騎士長の耳へ入った。

メノウたちが古都ガルムに到着したのは、夕方になってからだった。

前の列車で事件が起きたらしく発車時間の乱れはあってもものの、メノウたちを乗せた列車は何事もなくガルムの駅に停車した。

「お、お尻痛い……」

日本からやってきたアカリにとって、この世界の列車の乗り心地は、あまりよくなかったらしい。長時間の乗車だったこともあって、お尻を押さえている。よろよろとした足取りは、生まれたての子鹿のようだ。

長距離列車に乗り慣れていない人にはままするアカリの様子に、周囲の人もほほえまし気な視線を見ている。メノウも苦笑しながらも、アカリの表情を観察する。

いまのアカリに余裕があるはずがない。異世界に召喚されて、幾日も経たないうちにメノウに連れられて街を移動している最中だ。王城で出会って時も、メノウは方便

で押し切ってアカリを連れ出した。あの時は^{ノブレス}第二身分から引き離すことを優先していたため、かなり詭弁じみた理由で連れ出したのは自覚している。あれで初対面の相手の信頼を勝ち取れるとはメノウも思っていない。

実際、いまでもアカリからは明確に心理的な距離が開いているのを感じる。

「つらそうね。オーウェル大司教への挨拶は後にしたほうがいいかしら」

「うう……ごめんなさい」

「いいわよ。明日の朝に挨拶すれば、大丈夫だから。それよりも、人ごみではぐれないようにね」

人ごみに流されないようにと無意識にアカリの手を取りかけて、止める。まだ手をつなぐような距離感ではない。

大司教であるオーウェルの計らいで、アカリ殺害のめどは立った。だが、あと数日間は彼女と行動をともしなければならない。

純粹概念を魂に宿す異世界人は、精神を崩すと無意識に魔導を暴発させることもある。下手に冷たくして、不測の事態を起こす可能性を高めるのは愚行だ。ホテルを探して通りを歩く途中、メノウはアカリの信頼を得るため仲よくしようと、屋台を指さす。

「アカリ、どうかしら。あの屋台に寄ってみない？」

「屋台……？」

「ええ、ガラム名産品の布を取り扱ってるみたい。ほら、綺麗でしょ」

布を扱っている観光客向けの屋台だ。店先に並んだ既製品の他、手作業で簡単なアクセサリーが作れるようになっている。メノウは店員に料金を払って、布を一枚受け取る。

「よかったら、カチューシャを貸して？」

「う、うん」

笑顔を向けると、アカリは頭に着けた白いカチューシャをおそろおそろ渡してくる。

メノウの指先が器用に動く。布が花の形になって、カチューシャに絡まって飾りになる。それをアカリの頭にそっと戻して、メノウはほほ笑んだ。

「はい、かわいい」

返事はなかった。アカリはびっくりしたように固まっている。

なにか、自分が下手を打ったのかとメノウが不安になり始めっていると、はっと我に返ったアカリが慌てて頭を下げる。

「あ、ありがとう。メノウさんには助けてもらったのに、えと、こんな素敵なものまでもらっちゃって……！」

喜んでいるというよりは、明らかに恐縮した様子だ。

せめて愛想笑いではない笑顔を向けてくれる程度には信頼を獲得したかったのだが、うまくいかなかった。無理に仲よくなろうとすれば、逆にアカリのほうが引いてしまいそうだ。

「どういたしまして。喜んで欲しかっただけから、お礼なんていいわよ」

「そ、そっか……ごめんなさい」

「ごめんなさいは、もっといらないって」

メノウは苦笑する。

プレゼントを渡ただけで好感度が上がるほど簡単ではない。ガルムにあるという異世界人討滅のための儀式場の用意が終わるまで、どうせあと数日だ。警戒されない程度の『いい人』の演技で乗り切ろうとメノウが判断した時だ。

少し、地面が揺れた。

「ッ！」

「地震……？」

警戒をあらわにしたメノウと違って、アカリの反応は薄かった。メノウが育って修道院で叩き込まれた知識の中に、日本は地震大国だというものがあった。アカリも地震に慣れているのだろう。揺れには気がついていて、大した震度でもなさそうだとのどかな表情を崩すことはなかった。

メノウは鋭い視線で石畳を見つめる。この国では地震がめったに起こらない。しかもいまの揺れ方は地震というより、どこかで爆発などの大きな衝撃が起こった余波だと思える。

街中まで伝わる規模で起こるものとなると、不穏でしかない。メノウが一人だったら、揺れの原因を探ることくらいはしただろう。

しかし、いまはアカリが傍にいた。立ち止まったメノウを不安げに見つめている。

「ど、どうしたの、メノウさん」

「ああ、ごめんなさい。地震にはちょっと慣れてなくて驚いちゃったの。ホテルに行きましょう」

「う、うん」

彼女の警護を優先する判断を下したメノウは、手を差し伸べる。万が一にも、はぐれないように。傍から見ればただの友人に見えるようにしながらも、決して見失うことがないように、という意図だ。

アカリは戸惑いながらも、メノウの手を取った。

メノウから差し伸べた手を握ったアカリの手のはらはやわらかく、温かかった。

剣を振り切ったアーシュナは、ふっと息を吐いて力を抜いた。

「やったか」

崩れ落ちた敵が再生することはなかった。

竜型の魔導兵と、ねじくれたヒモのような悪魔。それが旧王城を抜け出してガルムの下水区域を探索していたアーシュナを出迎えた。

同時に現れた二種の敵は手ごわかったが、手加減なしで導力を注ぎ込んで発動させた紋章魔導【拡張：斬撃】の一撃により、もとめて消滅させることに成功した。

その代償は、小さくない。

導力は相当量消費してしまった。大物二体との戦闘の後で余裕があるとはいいがたい状態だ。全身に、ずっしりと疲労感がのしかかっている。

だがここで撤退する選択肢はなかった。アーシュナが一時的にでも撤退すれば、証は隠滅されるだろう。

「一人身のつらいところだな」

こういう時にこそ、仲間がいればと痛切に思わせられる。アーシュナに信用できる者が一人でもいれば、別行動で情報を伝えることもできただろう。

だが身内に信用のおける人間は皆無だ。この国にいる限り、アーシュナが信用できる人間をつくっても豹変させられる可能性すらある。

グリザリカ王家に生まれるというのがそういう危険をはらむということをアーシュナが知ったのは、五年ほど前のことだった。

数人、人が変わってしまった知人や身内を思い出して、口端をゆがめる。

「これが終わったら、グリザリカを出てみるのも一興か」

父親が異端審問にかけられた後の国内はアーシュナにとって居心地が悪いものになる。なによりご国外ならば——きっと、あの姉の手も届かない。

「我が国ながら、闇が深い……」

アーシュナは肩で息をしながら、儀式場を抜ける。

方向的に、この先は教会の地下につながっている。すでにアーシュナの中で、この町の^{ファウスト}第一身分と^{ノブレス}第二身分の癒着は確実なものとなっている。戦闘を最小限にするため、慎重に進んでいく。

教会の構造からルートを予想し、そして時には勘を駆使して敵の巡回を潜り抜けていると、不意に視界が広がった。

「これは……」

半球状の構造は、儀式魔導を扱う施設によくある形だ。ひととき目立つのは、赤の素材が詰まった巨大なフラスコ。そして同心円状に並ぶ寝台には、変わり果てた女性たちが横たわっていた。

それらのすべてを差し置いて、アーシュナの目を引き付ける人物がいた。

「そうだとは思っていたが……本当に、あなただとはな」

最高位の神官であることを示す白の司教服を着た老婦人、オーウェルだ。

「ごきげんよう、アーシュナ殿下」

道端で知り合いと出会った様子と変わらない、ごくごく自然な挨拶だった。

儀式場を見た時には予想していたが、彼女が主犯出あるという現実を見て怒りが疲労を上回った。荒々しいほどの若さにあふれるアーシュナの瞳に、みずみずしく鮮烈な意志が宿る。

「……久しぶりだな、オーウェル殿下」

「久しぶりというほどだったかしら。殿下にお目にかかるのは……そうねえ…五年ぶりだったかしら。いやだわねえ、この歳になると一か月前も一年前も大差ないように感じられてしまうの。そのくせ、体の衰えは年々どくてねえ。嫌になるわ」

「そうか。残念だ、この国の英雄が腐っていたとは」

突き止めた真実に壮絶な笑みを浮かべる。

アーシュナは全身ぼろぼろだ。万全とはほど遠い。先ほどの悪魔と竜型の魔導兵。せめてどちらか片方だけならば余裕も残っていただろうが、二つの強敵を倒すためにつぎ込んだリソースはアーシュナから余力を奪い去っていた。

だが悲愴感はない。強大な敵を切り裂き、悪辣な罠を潜り抜け、ようやく本丸を捉えたという強い意志が瞳を光らせている。

「この町の地下は、ひどい魔窟だな」

アーシュナの全身から、力強い導力光の燐光が舞う。

アーシュナは知る由もないが、いまオーウェルの手勢は国境の監視に回しているため、教会は手薄になっていた。彼女の優れた勘が見事に間隙を突いたともいえる。

グリザリカでもっとも名高い英雄。ヒューマン・エラーと並ぶ導力災害、国を削る『竜害』すら平定した大司教オーウェル。

「あなたの伝説には、心を躍らせてもらったこともある。意外に思うかもしれないが——いまのいままで、この国でもっとも尊敬していた一人だった」

「あら、まあ」

腰の曲がった老婦人は、口元を押さえて上品に笑う。

「あなたが生まれた時には、もう、ここはできていたわ。殿下ご自慢の勘も大したことがないわねえ」

「まったくだ」

返答と同時に、踏み込んだ。

普通ならば十歩の距離を、たった一步でつぶす。間合いを詰め切り剣を振り下ろした。

しわくちやの老婆など、一刀両断にできる迷いのない剣だ。オーウェルを間合いに捉えた剣が、足腰の弱った老婆では決して避けきれない速度で迫る。

「殿下」

アーシュナ渾身の一撃は、気品ある老婦人の笑みを崩すことはできなかった。

「あなたの血筋に免じて、手加減はしてあげますよ」

杖から発生した三色の光線が、アーシュナの大剣を食い止めていた。杖頭にはまった石の色を見て、アーシュナはうめき声をあげる。

「三原色の輝石……！貴様ッ、『絡繰り世』と取引したな！」

「よくご存じですね、殿下。禁忌についてもお勉強をしっかりとなさっているようで、なによりですわ」

原色概念魔導。^{ファウスト}第一身分が禁忌に指定した魔道技術だ。列車を襲ったテロリストに原色の赤石を流したのもおオーウェルだと確信する。追突した列車事故の情景が脳裏によぎり、かっと頭に血がのぼる。

「どこまで堕ちたッ、オーウェル！」

吠えたアーシュナが大剣に導力を流す。

『導力：接続——王剣・紋章——』

手加減なしの【爆炎】の紋章魔導の発動まで、ほんの数秒。

その時間は^{ファウスト}第一身分の頂点に近い大司教にとって、あくびが出るほどに長かった。

「いけないわねえ、殿下」

ゆったりと腕を動かしたオーウェルが発動まであと一秒を切った大剣の刃に触れる。

「迂闊よ」

「——ッ！」

オーウェルの導力が王剣に流れていたアーシュナの導力を駆逐して弾き飛ばす。

紋章魔導の主導権が乗っ取られた。愕然と目を見開いたアーシュナが、とっさに剣

を引こうとする。

だが行動を起こすよりもオーウェルが大剣の魔導紋章を発動させるほうが早かった。

『導力：接続——王剣・紋章——二重発動【障壁・爆炎】』

アーシュナの動きが壁にぶつかり阻害された。彼女の周囲に障壁が張り巡らされたのだ。障壁によって四方を閉じ込められたアーシュナの鼻先に、火種が生まれる。

展開された【障壁】のせいで回避は不可能だ。エネルギーの逃げ場のない密閉空間で、【爆炎】がはじけた。

「……ぐっ」

爆発の衝撃に襲われながらも、アーシュナは剣を構えたままだった。【爆炎】を導力強化でしのいだがダメージは小さくない。体のあちこちで、ひきつれるような火傷の痛みを感じる。

「多重紋章が刻まれた導器は、こうして紋章魔導を組み合わせる使うの、おわかりかしら」

オーウェルの声は、まさしく子供をなだめる大人の余裕に満ちていた。

ここに至って、予想以上に実力差があったのだと悟る。

「……さすが、^{ファウスト}第一身分の最上級たる大司教だな。これが我が国を救った『竜害平定者』か」

「あらあら。この国を救った頃の私がこの程度だったと思われても困るわ」

およそ五十年前、国を削る導力災害『竜害』を平定したオーウェルの功績は有名だ。彼女の力量の一端に触れて少なからぬ畏怖を浮かべるアーシュナに、オーウェルは微笑む。

「ええ、ええ……あの時の私は、本当に、大したものだったわ。強さも、美しさも

——心も」

オーウェルが心身ともに万全だったのは三十代に至った頃だった。全盛期と比べれば、老婆となっただけの彼女は見る影もないほどに衰えている。それでも単身でアーシュナを圧倒するほどに恐ろしい魔導行使者が、昔を懐かしんで目を細める。

「まるで聖人のような聖職者だったわ」

鎖となった原色の光が、アーシュナを拘束する。ただの導力光ではない。明確な質量を持っている。

「そう簡単に……捕まると思うな！」

導力強化をしたアーシュナは、力づく原色の鎖を引きちぎる。明らかな劣勢にあって心を折ることなく剣を構えたアーシュナを見ても、オーウェルは特別な反応は見せない。ただ穏やかに笑ったままだ。

「あら、まあ。殿下を閉じ込めるのは骨が折れそうねえ。とはいえ、ここにいる若い子たちのようにするのも、憚られるし、困ったものね」

この儀式場の周辺には干からびた死体が並んでいる。

この儀式場の首謀者であるオーウェルがゆったりと杖を振り上げる。

「少し、弱っていただくわ」

三原色の光が乱舞した。

とりあえず、メノウの手持ちで泊まれるホテルをとることができた。

旅慣れていないアカリに気を使って、ちょっとお高めのホテルを選んである。メノウが一人ならば、絶対に利用しないお値段を、二人分である。

「……あとで経費、出るかしら」

憂い気に呟いたメノウは、ベランダに出る。ここまでの道中で気疲れしたのか、ア

カリは早々眠ってしまった。ガルムはこの世界で有数の風光明媚な場所なのだが街並みの感想や、観光をしたいという言動も出なかった。

「せんぱーい！」

ベランダに出るやいなや、小さな影が飛びついてきた。

桃色のふわふわ髪をリボンで二つ結びにした少女、モモである。彼女はメノウが育った修道院時代からの後輩だ。いまではメノウの補佐官として欠かさないほど優秀な少女である。

「別行動になっちゃってごめんね。それよりも」

モモの突然の出現にも、メノウは慣れたものだ。慌てず騒がず後輩を受け止めて、衝撃を受け流す。そして、ひつつくモモをべりっとはがして目を合わせた。

「そっちはいろいろ大変だったって聞いたわ。話を聞かせて？」

「ああ、テロリスト連中の件ですかー」

流れるように仕事の話に移行したのを残念そうにしながらも、モモはメノウと別行動になっていた時のことをきっちり報告する。

「モモは同じ車両にいたテロリストをボコって、あのお姫ちゃまに絡まれたときにさっさと列車から飛び降りて逃げたので、よくわからないんですう。どーもテロリストが体内に赤石を仕込んでたらしくてえ。魔導兵が発生して、大規模な事故になったらしいって情報しかありませんー」

「当事者のアーシュナ殿下がどうしているのか、わかる？」

「さー？旧王城から出た様子はないので、たぶん、おとなしく宿泊してるとおもいますー」

モモの返答は素っ気ないものだった。単純にアーシュナに興味がないのだろう。グリザリカの末娘であるアーシュナは『姫騎士』と呼ばれる禁忌とは真逆の存在だ。処

刑人である二人にとっては現場でかち合うという不幸でもない限り、警戒する相手ではない。

だがメノウは、先に到着しているはずのアーシュナがなにも動いていないということが気になった。

「大人しくしてる、ね」

『世直し姫』と言われるほどに行動的な彼女だ。訪れた街で女性の連続行方不明事件などがあれば、いかにも首を突っ込みそうである。

だというのに、先に来ているモモの話だと、アーシュナは旧王城にこもりきりになっているのだという。列車事故での疲労によるものとも思ったが、『原色理ノ赤石』が列車事故に関わっていたとなると話が違ってくる。

「モモからみて、実際にあったアーシュナ殿下の印象はどうだった？」

「噂通りというか、噂以上に『姫騎士』な^{ノブレス}第二身分ですねー。裏表はなさそうですけどお、見た目も行動もいかにも派手好きな感じでいけ好かないですうー」

「そう……」

風評が的外れでもないというのなら、やはりおかしい。

そして、もう一つ。

ガラムに着いたときに感じた、あの揺れだ。

「気になることでもあるんですかあ？あの異世界人をオーウェル大司教に引き渡して、ハッピーエンドで終わりじゃないですかー。先輩が悩むようなこと、ありますう？」

「少し、ね。モモ。お願いがあるんだけど、いい？」

「もちろんですう！モモは先輩のことがだーい好きなので、なんでも言うこと聞きますよお！ご用命はなんですかー？」

「旧王城に忍び込んで。アーシュナ殿下が、まだそこにいるかどうかだけ、教典で報告をちょうだい。私も情報収集にあたるわ」

「了解ですう！先輩はどこを調べるんですかー？」

「地下よ」

メノウはすでに目星を付けていた。さっきの不自然な地震。あの揺れには、なにかある。

ちらり、と部屋を振り返る。ベランダから見えるベッドでアカリがすやすやと寝ているが見える。

「この街は、なにかあるわ」

長く離れられないが、あの時の地震の原因だけでも探る必要がある。

メノウはモモに続いて、ベランダからひっそりと街に舞い降りた。

震源が地下だということを、メノウはモモとの会話の前からほとんど確信していた。

古都ガルムは風光明媚な町で、観光産業が盛んだ。そのため表向きの清潔さと治安のよさを保つため貧困層を地下に押し込んだ。結果として形成されたのが、ガルムの貧困地下街だ。

つまり、この町で後ろ暗いことをするならば地下である。

その根拠をもとに^{ノブレス}第二身分の拠点である旧王城の地下周辺を探索すると、あからさまに怪しい隠し通路を発見した。黒光りする奇妙な素材でできている空間だ。

「これは……」

下水路の広がる地下区域を歩いていたメノウの小さな呟きは、閉鎖空間の通路で反響して消える。タイミングのよいことに、モモの通信も入ってきた。

『旧王城に、アーシュナ・グリザリカの姿はありませんー』

『騎士が出動している様子は？』

『それありませんねー。のんびりしたものですう』

モモから伝え聞く状況からすると、この町の騎士たちは上からの指示が出ていないのだろう。お姫様の姿が見えないとなれば、もう少しあわただしくなるはずだ。

アーシュナを泳がせているのか、それともほかの理由か。

『ありがとう。モモは、ホテルに泊まっているアカリの護衛をお願い。本人には気が付かれないようにね』

『はいはい。了解ですう！』

通信を終えるのとほとんど同時に、特殊な素材で形成されている円形の通路の終わりが見えた。たどり着いたのは、戦闘の形跡がある儀式場だ。

王城と大聖堂の間にある転移魔導陣の実験場。そこで行われたと思しき戦闘痕。さらには本来いるべき旧王城を抜け出している『世直し姫』アーシュナ・グリザリカ。

これらの意味を、メノウは見誤らなかった。

『……』

静かに、目を閉じる。

まだ、道は奥に続いている。

だが奥に行くまでもなく、メノウは黒幕についての答えを出しつつあった。

深入りするのはリスクが高い。アカリを連れていることを加味すれば、なおさらだ。

だが放置できる問題では断じてない。

「……ッ」

下唇をかみしめたメノウは、モモを呼び寄せるために通信魔導を発動させた。

「オーウェル大司教は、禁忌に触れているわ。しかも^{ノブレス}第二身分と組んでいる」

地下儀式場でモモと合流したメノウは、自分の考えを告げた。

位置関係からして、ここは^{ファウスト}第一身分と^{ノブレス}第二身分が共謀した結果にできたものだろう。^{ノブレス}第二身分だけの技術では困難な儀式場なのはもちろん、協力関係がなければ^{ノブレス}第二身分が禁忌の施設を大聖堂の近くに造るはずがない。

「今回の異世界転移の黒幕も、おそらくはオーウェル大司教ね」

「大司教が……」

モモが絶句する。

大司教だというのは、^{ファウスト}第一身分の実質的な最高位だ。一つの教会を治めるのが司祭、一つの教区を任されるのが司教、そして一国の聖職者すべてを束ねるのが大司教である。

大司教というのは、一国の^{ファウスト}第一身分すべての頂点にいる立場だ。同等以上なのは、他国の大司教しかない。メノウやモモのような一介の神官とは、比べるのもおこがましい位階である。

「今回の異世界人召喚は、グリザリカ王を隠れ蓑にオーウェル大司教が行ったと考えるのが妥当よ。そこまでしたなら……きっと、あの子の純粋概念が目的でしょうね」

そんな立場の人間が禁忌を犯したというのは、モモにとっても少なからぬ衝撃だったようだ。

だがメノウの話を聞いたモモはずくに頭を切り替えた。

「報告しましょう、先輩。二人で手に負える事態じゃないですー」

「誰に、報告するの？」

「誰って——」

当然、上層部にと言いかけたモモが言葉に詰まる。

オーウェルの地位は大司教、この国の第一身分のトップだ。しかも王都での異世界

人召喚に関わっているのならば、第二身分とも強固なつながりがある。

もちろん、国にいる第一身分と第二身分のすべてが禁忌に加担してる、などというのとはさすがにないだろう。だが、少なからぬ割合でオーウェルに引き込まれて禁忌に手を染めていることは間違いない。

この国の全員がオーウェル側にいるということはなくとも、上層部の一部は確実にオーウェルの派閥となっているだろう。他国から来たメノウたちでは、誰を味方に付ければいいのかすら判断ができないのだ。

ここの情報を報告したところで、どこで握りつぶされるかわかったものではない。

「異端審問官は、どうですか？この国在住ではなく、グリザリカ王を裁くために聖地から来たのがいます」

「いまから私たちがガルムから王都に戻って、彼女たちと合流するのに間に合うかしら」

「……いえ。たぶん、撤収しています」

本来はそのタイミングでモモもこの国から引き上げる予定だったのだ。グリザリカ王の処分は、すでに在住の異端審問官に引き継いでいるだろう。この国の人間では、オーウェルの息がかかっていない保証がない。

すでにこの国には、オーウェルを裁ける人間などいないのだ。

かといって、国外への連絡手段をメノウは持ち合わせていない。

むしろオーウェルを裁ける例外的な人物とは、外部から来た処刑人であるメノウ自身なのだ。異世界人に限らず第一身分が禁忌と定めたものに手を染めた違反者を裁ける権限を与えられているのが第一身分の処刑人だ。

だがメノウは、オーウェルに自分一人で立ち向かうには力不足であることを自覚していた。

権勢も、能力も、準備なく立ち向かっていい相手ではない。

慎重に相談する相手を見定めて、グリザリカ国内に潜伏しながらオーウェルの対抗勢力をつくって——などということを、国の外から来たメノウにできるはずもない。

それができるとしたら、一人。

「アーシュナ殿下の生死を確認するわよ」

この国で第三身分から人望を集めていつアーシュナ以外にいない。

「……あのお姫ちゃまも、ここのたくらみに気がついているって考えですかー？」

「ええ。アーシュナ殿下が評判通りの人間なら、ね」

グリザリカの『姫騎士』に嗅ぎまわられるのは、オーウェルにとって目障りだろう。

アーシュナがいるべき場所にいないというのなら、そういうことだ。

生きているのならば救出する。最悪、もしも死んでいたとしても、このガルムの地下で第三身分の人気の高い『姫騎士』が不審死をしたという汚点をオーウェルに押し付けることができる。

「できれば、生きてて欲しいわ」

「死んでたらあっさり隠ぺいされそうですもんねー。というか隠ぺいできなきゃ殺さないですよねぇ、ここまで周到な相手だとー」

タイムリミットは、夜明けまで。アーシュナ救出が成功しようが失敗しようが、この作戦行動中には、オーウェルもメノウが真相にたどり着いたことを悟るはずだ。

時間との戦いになる覚悟を決めたメノウは、太ももに装備した短剣の柄に触れる。

「いくわよ、モモ」

「はい、先輩」

導力光を纏った二人は、大聖堂の地下へと続く道へ進んだ。

暗い地下儀式場で、アーシュナは触手に四肢を拘束されていた。

中央に真っ赤な物質が入った巨大なフラスコを置いた半球状の施設だ。その中央で、アーシュナは椅子型の悪魔に座らされ、接触した四肢に拘束部分から、わずかながら生命をむさぼられていた。地下儀式場にあった遺体を贄に原罪魔導によって召喚された悪魔を使い、アーシュナを回復させないための拘束をしているのだ。

見張りとして、数人のしんかんがいる。極めつきは、魔導兵である【赤】の天使だ。この布陣では、万全な状態のアーシュナが戦っても勝利は難しい。武器もなく、消耗したアーシュナでは逃げることも困難だ。

「殺さないとはな……」

ぼそりと呟いた声は弱々しい、周囲の神官は気にも留めなかった。

本当に言葉通り血筋に敬意を払ったのか、それとも他の理由か、オーウェルはアーシュナを殺すことなく捕縛にとどめていた。

オーウェルはアーシュナを捕縛する悪魔を召喚した後にこの儀式場から立ち去った。時間的に、就寝しているのだろう。

最大の難敵であるオーウェル自身はいなくなっているが、警戒の姿勢は万全だ。五体満足で生かされているとはいえ、弱り切ったアーシュナ単独では脱出することは不可能と断言している。

しかし、この場の警戒態勢は、あくまで内側にいるアーシュナを逃がさないためのものだ。

真っ先に異変を感じ取ったのは、宙にたたずんでいた天使型の魔導兵だった。雌雄同体の魔導兵が、地下通路につながる出入口の扉へと剣を向ける。

魔導兵の動きと、ど派手な音を立てて閉められていた扉が吹き飛んだのは、ほぼ同時だった。

「あれは……」

アーシュナは、弱々しい声を上げる。侵入者は白服の少女だ。彼女は捕らわれのアーシュナをみて、大きく舌打ちを飛ばした。

列車でアーシュナと交戦した神官補佐だった。一当てしたらさっさと列車から飛び降りてしまい、アーシュナは機関車で起動した魔導兵の相手をしなければいけなかったのだ、それきりだった。オーウェルに捕まった時は、ここの神官たちの一味でテロリストの扇動役だったのかとも思ったが、どうやら違うらしい。

彼女は、飛びかかってきた魔導兵に正面から拳を叩き込んだ。

「なッ——!？」

驚きの声が上がったのも無理はない。多くの素材を費やした天使型の魔導兵が正面から殴り飛ばされる光景など、そうそう拝めるものではない。

全員の注目が、白服の神官に集まった瞬間だ。

儀式場の中心にあるフラスコが、燃え上がった。

赤の素材を使った原色の炎。絵に描いたように不自然な色を赤い炎が侵入者である白服以外の神官たちに襲い掛る。

「なぜ、赤の素材が暴走を……！」

今度こそ神官たちの間に混乱と動揺が広がった。しかし彼女たちは優秀な魔導集団だ。うろたえながらも各々、教典や神官服の紋章魔導で防御する。

炎で視界が遮られ、防御のために場の動きが止まった虚を衝いて、アーシュナの傍に一人の神官が現れた。

『導力：接続——教典・九章三節——発動【邪悪なる在り処を知り、光にて照らせ】』

一切の無駄のない、滑らかな導力操作による教典魔導。照射された導力光が、アーシュナを捕らえていた悪魔を消し去る。あまりの早業に、炎から守っている神官たち

はまだアーシュナが解放されたことに気が付いていなかった。

「……君は？」

「助けに来ました。オーウェル大司教とは無関係の第一身分の一派です」

アーシュナの問いに応えたのは、黒いリボンで髪をくくった神官だった。

アーシュナを助けるために儀式場に強襲をかけたのは、もちろんメノウとモモである。

モモが派手に音を立ててとびらを壊したと同時に、導力迷彩で入ってきたメノウが投てきした短剣と【導糸】で『赤』の素材に干渉したのだ。アーシュナすらも気がつくことができない隠形だった。

アーシュナの拘束を解いたが、立ち上がろうとした彼女がよろめく。歩行もままならないほど弱っているのを見て、メノウはアーシュナを肩に担ぐ。

「モモ！」

「はい！」

短い一声でメノウの意思を感じ取ったモモが天使型の魔導兵を蹴り飛ばして、距離を取る。メノウたちは戦いに来たのではない。あくまでアーシュナの救出が第一目標だ。

「逃がすな！」

鋭い声が響くが、もう遅い。アーシュナを肩に担いで出口まで下がっていたメノウの隣に、モモが着地する。

『導力：接続——教典・三章一節——発動【襲い来る敵対者は聞いた、鳴り響く鐘の音を】』

メノウが発動させた教典魔導の鐘が鳴り響き、儀式場の出入口を崩落させた。

「さっすが先輩ー！最高のタイミングですう！」

モモが歓声を上げる。足止めとしては、十分だ。

黒光りする素材の通路を、アーシュナを担いだメノウとモモ逆走する。

「助かった……我ながら、情けない」

メノウに負ぶわれているアーシュナが、疲れ切った声を出した。生命力をむさぼられ続けた彼女は自力で歩くことすら難しい状態だ。

「相手が相手です。名高い姫殿下でも、厳しかと」

「……そうか」

儀式場から逃げるときに崩した瓦礫をまだ撤去できていないのか、追っ手の気配はない。どうにか逃げきれそうだ。アーシュナと会話をしながらも、メノウがそう判断しかけた時だ。

「――う」

うめき声を上げたのは、三人のうちのどれだったか。

強大な、魔導発動の気配が地上で解き放たれた。隠すことなく放たれた魔導が、地下空間にまでプレッシャーなってメノウたちを襲う。

「上だ！」

アーシュナの警告と同時に、通路の天井が崩落した。

「ッ！」

地上から地下道の天井をぶち抜いてメノウたちを強襲したのは握りこぶしほどの大きさの人型をした光だった。一对の羽の生えた姿は、絵本に描かれる妖精のようにも見える。

その場にいる三人は、現れた存在を注視する。

「なんだ、あれは……？」

「……これ、は」

とっさに返答することができなかった。魔導に精通しているメノウですら、把握していない存在だ。導力の固まりが浮遊しているように見えるが、おそらくは違う。

驚くべきことに、妖精には導力の気配を感じない。

明らかに魔導のたまものなのに、導力反応がない。その事実がなにを意味するのか理解し、戦慄が背筋を駆け抜けた。

メノウは、とっさに教典に導力を通す。

『導力：接続——教典・二章五節——発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

妖精の羽は、高速で振動した。

昆虫類を思わせる高速の羽ばたき。この場にいる三人の動体視力を置き去りにして妖精が宙を滑る。

空中を高速飛行した妖精は、メノウがとっさに発動させた防性魔導に激突。衝撃で、教会の壁を模した魔導が打ち碎かれる。

「ッ！」

「先輩！」

一撃で教典の防御魔導が碎かれることなど、通常ではありえない。叫んだモモが糸鋸を振るう。狙いたがわず迫る糸鋸に、妖精が矮躯の腕を動かした。

妖精に触れた糸鋸が蒸散した。

「は」

モモがあっけにとられた。糸鋸とはいえ、導力強化で強度を底上げしているものだ。アーシュナの剛剣と打ち合っても破損しなかったというのに、まさかの蒸発である。

だが、ほんの一瞬の時間を稼げた。

『導力：接続——短剣・紋章——発動【疾風】』

紋章魔導を発動し短剣から吹き出す風を味方に飛びのいたメノウが着地する。

妖精から大きく距離を取ったメノウは目つきを厳しくする。見た目の小ささなど問題にならない脅威だ。

「先輩！こいつ、物質じゃありません!!導力生命体ですらありませんッ。発動した後の魔導現象です！」

「わかってるわ！こんなものを顕現させられる魔導は、純粹概念以外には一つだけよ！」

メノウの展開した教典魔導をあっさり突破し、モモの物理攻撃も一蹴する。いままで見たことがない魔導だが、系統だけはわかる。メノウは奥歯をかみしめながら、怨嗟の声を漏らす。

「原色概念魔導……！」

それは、人々が『魔法』と夢想するおとぎ話の実現にもっとも近い魔導だ。魔導兵がもっとも安易な使い道として知られているが、潜在的な脅威の度合いは、ある意味では原罪魔導よりも高い。

なにせ理論上ではあるが、原色魔導にはできないことがない。

「……私を追っているな」

「はい」

アーシュナのつぶやきは的確だった。メノウは首肯する。

羽ばたく妖精はアーシュナの導力反応を追尾している。あそらくは悪魔の残骸から、アーシュナの導力を抜き取って、反応させているのだろう。

「オーウェルは原色の輝石を三色すべてお揃えていた。これは、間違いなく奴の仕業だろう」

「……大司教ほどの魔導行使者が原色概念を扱えば、できないことのほうが少ないでしょうね。それにしたって、どうすれば実現できるかわからない魔導ですが」

目の前の妖精は、まず間違いなくオーウェルが発動させた魔導現象だ。

原色魔導発動と同時に、『アーシュナを追尾し、捕える』という現象を起こし続けている。その過程で、あの妖精という形をとっているに過ぎない。おそらく、状況によってはまったく別の形にもなるだろう。

物質的な現象を引き起こすのではなく、観念的な魔導現象を発動させるなど、いっばしの魔導行使者としての自負があるメノウにとっても気が遠くなるような高度さだ。それだけの魔導現象を発動させた魔導技能、導力量は絶大だ。メノウの導力操作を上回るのはもちろん、下手すれば、この魔導を発動するだけでモモの潜在導力量に匹敵しかねない導力を消費している。

「と、いうことは一。お姫ちゃまをみすてれば、先輩とモモは逃げれますねー」

「いざとなればそうしてくれ。足手まといはごめんだ」

「……うっわ。キモっ。殊勝になられてもうざいとか、ある意味才能ですね」

モモが毒づきながら予備の糸鋸をスカートの裾から出す。メノウも油断なく短剣を構える。

羽の生えた妖精はアーシュナのみを狙っているわけではない。アーシュナを捕えるという結果を引き起こすために、周囲にいる人物を排除にかかるだろう。

「いま床に置いてくれてもかまわない。誰一人として君を責めることはない」

「殿下。次に弱気なことをおっしゃったら、信じられない激痛が御身を襲うことを覚悟してください」

「しか——じぐァ!？」

背中で悲鳴が上がる。

メノウが、アーシュナの導力を通したのだ。人体の導力接続は壮絶な痛みを伴う。特殊な体質をしているメノウはともかく、無理やり導力を引き抜かれたアーシュナの痛みは気絶をしていないのが不思議なほどだろう。

「き、君、なあ……！」

「警告はしましたので」

痛みに引きつった文句を、さらりと受け流す。

それに、メノウも無意味にアーシュナの導力を取り込んだわけではない。

妖精が、戸惑ったようなメノウとアーシュナを見比べていた。

導力で個体識別をしていた妖精には、アーシュナの導力を引き込んだメノウとアーシュナ本人の見分けがつかないのだ。

メノウは五イン硬貨を指ではじて、妖精に投げつける。

「こっちよ、ポンコツ現象」

妖精の顔が、メノウに向いた。

言葉が通じているはずはないが、どうやら先にメノウを仕留めることにしたようだ。どうせ両方を捕えるつもりなのだろうが、メノウに攻撃が集中するならば狙い通りだ。

メノウは肩に担いでいたアーシュナを床に下ろす。

「モモ、時間は私が稼ぐわ」

「はい、まっかせてくださーい！」

なにをすべきか。メノウとモモの間に意思の疎通に多くの言葉は必要ない。

戦闘が開始された。

二度目の揺れで、アカリは目を覚ました。

「ふわぁ？」

地震もそうだが、周囲の人々の喧騒が大きい。

「なんだろう……日本より揺れる国なのかな？」

こっそりと窓の外から通りを見る。なにか、夜にしては人の動きが激しい気がする。

だが、異国ならぬ異世界だ。一人で外に出る気にはならなかった。

「大丈夫……大丈夫、なはず。すぐに日本に帰れるって、メノウさんも言ってたもん」

ぎゅっと目を閉じて、ベッドに入る。

瞼の裏に浮かび上がったのは、日本の教室だ。こんな夢みたいな現実は、あと数日で終わる。いくら教室の居心地が悪かろうが、こんな世界にいるよりかはましだ。日本語は通じるが、それだけ。いきなり召喚されて振り回されて、アカリの不安と孤独は高まっていた。

「帰るんだ……あと、数日で」

けれども。

瞳を閉じたアカリの瞼の裏には、ここまで自分を連れてきた少女の姿もなぜか想起されていた。

モモが教典を広げた。

白服を纏う小さな体躯から、ぶわりと多量の導力光が発生する。それと同時に、メノウは駆け出した。

メノウに狙いを定めた妖精の羽が、振動する。

宙を滑り三次元を疾走する動きは、目で捉えるのも難しいほど高速だ。防御不能、回避も厳しい。もしも妖精に人並みの知能があれば、メノウはまたたく間に敗北しているだろう。むしろ、いま五体満足で立っていること自体が奇跡なのだ。

だからこそメノウは、いまどうして自分が無事なのかを冷静に分析していた。

妖精の動き出しに合わせて、メノウは新たに取り出した五イン硬貨に導力を通す。

『導力：接続——五イン硬貨・紋章——発動【導泡】』

ぶわり、と導力の泡が広がった。

まったく殺傷能力のない魔導に、妖精は反応した。人間相手ならば目くらまし程度にしか使えない子供だましの魔導だが、高速で動く妖精はわざわざ泡の一つ一つに向かって攻撃を仕掛けて駆逐していく。

「やっぱり」

あの妖精が捕獲対象を見分ける手段は、導力反応しかないのだ。だからメノウがアーシュナから受け取った導力を注ぎ込んで【導泡】を生成すれば、そちらとアーシュナ本人と区別がつかずに、近くにあるアーシュナの導力を捕獲しようと動いてしまう。

これならばモモの準備が終わるまで時間稼げそうだと、後輩に視線を送る。

教典を開いたモモは、精神を集中させて教典魔導の魔導構成を展開させていた。

『導力：接続——教典・一章四節全文——発動【「お前はなにをしている。」王は問うた。女は答える。「井戸を掘っております。」乾いた大地。ひび割れた地。砂のさなか。王は不思議に思う。水無き地。この世の終わりになぜ。王は言う。「水は湧かぬ。鉱脈は尽きた。油も干からび果てた。平穏はない。秩序もない。今の世界で何が湧くか。埋まるものがあるのか。見出せるものがあるのか。掘り起こすべきものが、あるのか」女は答える。「死んでおりませぬ。』

モモは戦闘ではめったに教典魔導を使わない。威力と発動速度を勘案した場合、彼女の導力量だと肉弾戦で十分だと感じる人が多いからだ。だから使うとしても戦闘用でない魔導ばかりだ。

モモの導力が教典を通して地下の地脈に干渉していく。

モモに地脈を制御できる導力操作技術はない。地脈に干渉できる数少ない魔導であるが、本来ならば特に習得する理由がない魔導である。

『へとつながり、この星の光により平穏を知らしめる壁ができるでしょう。』王は、信じた。彼は見放されてなどいなかった。王はひとを集め、地を掘り、光をみて、知った。希望を。つなげるものを。そう、主の御心は天地に通じ、千里のかなたまで征く』

経路が、つながった。

あくまでつながっただけだ。教典魔導が不得意なこともあって、モモが引き出した地脈は物質的な圧力を持つほどの流れではなく、それ自体が攻撃的なものにはならない。やはり、モモ単独では無意味に近い魔導だ。

これはモモがメノウのために習得した教典魔導なのだ。

「ありがとう、モモ！」

モモが引き込んだ地脈に、メノウは干渉する。メノウの場合は地脈に干渉するための導力量がたりない。引き込む量はモモのほうがはるかに多い。

モモが地脈から大量の導力を引き出し、メノウが操作する。

規模が大きい相手に対して、それが二人の定石だった。

『導力：接続——教典・十四章三節——発動【伸ばせ、天よりも高く、月に届くほどに】』

メノウの教典魔導によって、地下から噴き上げる導力に形が与えられる。

一本の、巨大な剣。

至近距離では全容もつかめない膨大な体積の刃。メノウたちがいる地下からガルの地上へとそそり立つほど巨大な導力の剣が、妖精を貫く。

メノウがモモから受け取った【力】をぶつけると同時に、今日、最大級の揺れがガ

ルムの市民たちを揺さぶった。

三度目の揺れが、オーウェルの老体を揺さぶった。

さほど強くない揺れだったが、からんと音を立てて杖が転がった。杖頭にはまっている三色の石がきらきらと輝きを反射する。

「あら……少し、無理をし過ぎたかしら」

大聖堂のベランダから崩落した大通りの崩落部分を見ていたオーウェルは、慎重に椅子に腰かけた。

肉体的に老いたオーウェルにとって、自らで追跡する体力勝負は厳しい。アーシュナの脱走報告を聞いてから確保のために放った妖精は、戦闘していたメノウが推測したように原色魔導によって発動した魔導現象だ。

今回ほどの魔導を発動させることが可能な人物は、オーウェルを含めても数人程度しかいないだろう。

原色魔導は、発動させる現象が複雑になればなるほど精神と導力を削る。今回の魔導はオーウェルにとっても予想以上の消耗を強いた。

「こたえるわねえ……」

オーウェルが放った原色魔導の妖精が穿った穴の周辺に、人が集まり始めている。穴から突き出た導力の剣を遠巻きに、なにが起こったのかと騒いでいた。死人が出るとうるさいので人がいないことを確認した上での攻撃だったが、二次被害がゼロということはないだろう。

大通りに穿たれた穴から突き出していた導力の剣が霧散する。見覚えのある教典魔導は、かつてオーウェルの同期だった人物も得意としていた魔導だ。

「……しのいだのね。それに、少し派手になりすぎたわ」

とはいえ、この騒動に対する^{コモンズ}第三身分への言い訳は簡単だ。竜の魔導兵と召喚された悪魔。二つの残骸を見せれば、あっさりと納得するだろう。地下に忍び込んでいた二つの脅威を、オーウェルが取り除いたのだと取り繕うのは容易である。

問題はアーシュナ。

「脱走されてしまうと、殿下の取り扱いは難しくなるわね」

この町の人間は、中枢に近ければ近いほどオーウェルに心酔している者が多い。アーシュナを逃してしまったと報告してきた部下は、ともすれば自刃しかねないほどだった。それほどに、オーウェルという神官の実績と人格が優れていた。

だが、グリザリカ王家は質が違う。

千年続くグリザリカ王家には、オーウェルですら踏みこむのがはばかれる闇が潜んでいる。そして、単純な戦闘力だけでもオーウェルの首を落とせるであろう人物が一人いるのだ。慎重にならざるを得ない。

それに加えて侵入してきたのは白服を着た神官だと言う。欺瞞の可能性もあるが、素直にメノウの補佐官の少女だと考えるのが妥当である。

「ずいぶんと優秀な子をかかえていたのね」

さすが『^{フレイア}陽炎の後継』というべきか、それとも^{マスター}導師『^{フレイア}陽炎』の成果というべきか。もともと引き離して対応するつもりだったが、今回はオーウェルが干渉する前から行動を起こされてしまった。

原色概念を用いた捕獲魔導も相殺されてしまった。あれを切り抜けたならば、メノウたちはすぐにガラムから脱出するはずだ。

ガラムから未開拓領域に出たのならば、行き先は隣国の港町リベールだ。グリザリカ王国を出てしまえば、オーウェルの影響力は低下する。隣国の国境、港町リベールの教会を治めているシシリア司祭は籠絡できていない。間接的な接触は何度も試みた

のだが、彼女はあらゆる誘惑と悪徳をはねのける実直な神官だ。正義でも信仰でもなく、あるべき現実として^{ファウスト}第一身分のあり方を遵守している。

「少し、早いけど仕方がないわね」

終わったことを責めても、なに一つ取り返しはつかない。

本当ならば聖地に座す『主』に対抗できるだけの力が——せめて、聖地を守護するあの大神を倒せるだけの力が欲しかったが、ないものねだりだ。

「部隊を派遣して。けれども深追いは禁物よ」

オーウェルはベランダから、部屋の中にいる部下に指示を出す。

逃げる場所は、未開拓領域のほかない。

捕縛できれば最上だが、逃げられても構わない。【時】の純粹概念と、それを操る可能性を秘めたメノウという素材は貴重だが、その二つは、オーウェルの個人的な欲求をかなえるものだ。これから行うことに比べれば、優先度は高くない。

なにより、異世界人を引き連れた『^{フレア}陽炎の後継』は——『^{フレア}陽炎』を引き付けてくれる、いいエサになる可能性もある。

「始めるわよ。『主』など、信じるものではないと知らしめなければいけないわ」

「はっ！」

ベランダから、部下たちの控える部屋へと戻る。

前々からこの国を、切り離すための絵図は描いていた。実行のタイミングが来たというだけだ。国内には協力者も十分すぎるほどにいる。このグリザリカ王国を、いま^{ファウスト}の第一身分の干渉から独立させることはできるはずだ。

あとは、聖地にいる『主』を崇める^{ファウスト}第一身分という立場をどれだけ叩けるか。それに尽きる。

最初にして、最大の指令を出す。

「まずは、教典の焚書を進めなさい」

ほとんどの神官が、常に左手に抱える教典。魔導書という武器であり、信仰の証しでもある。

だからこそ、この国で大々的に焚書を進めることで、大陸に知らしめてやらねばならない。

ファウスト
第一身分のいびつさ。『主』への信仰のくだらなさを。

「……」

オーウェルは自分のしわくちゃの手を見つめる。

自ら信仰を手放した。正しく、きれいなものを捨てた時、自分はどんな感情を抱いていたのだろうか。

その時の思い出は、すでに色あせている。

いま教典の代わりに手に握られているのは、禁忌として指定された三原色の輝石がはまった杖だけだ。

部下が指示に回って、一人残された老婆はぽつりとつぶやく。

「『主』よ……あなたは、どうして……」

老婆の口から、どうしようもない恨み言が漏れる。

教典を手放したのと同時に信仰が抜け落ちた心に、ぽっかりと空虚な穴が開いていた。

信じるに値するものが欲しかった。自分の信仰に値する存在を欲していた。長年信じていた偶像の実像を知り、失望した。長年の友人だと思っていた者の真実を知って、羨望の妬みに焼かれた。

人生の晩年に至ってから、生涯で信じていたことを後悔するのは、自分の一生を台無しにするのと同じに等しい。

若いうちならば、失意も成長の糧となっただろう。だが長年、信じていたものの正体を知ったときオーウェルはどうしようもなく老いていた。

自分を変えることなどできず、周囲を変えるしかない絶望するほどに。

オーウェルという聖職者は、一度、完成してしまっていた。

強く、美しく、慈悲深く、人徳にあふれたオーウェルという聖職者としてかくあるべしと称えられた。国を救うほどの功績を立て、一片の曇りもない信仰と清純な心があった。

請われれば、どのような人間でも助けるのが自分だと疑っていなかった。世界は無理でも、手の届く人を救って、自分が生まれ育ったグリザリカ王国をよりよくできると信じて疑っていなかった。

愚かなほどに、若かった。

一国の闇はあまりにも深く、若輩の頃はおろか、大司教となったオーウェルですらままならない。

この世界において、権力などたかが知れている。

一度完成してからのオーウェルは、年月が経つにつれて端からぼろぼろと崩れていた。失う自分を受け入れる諦観こそが老いなのだと悟った。

「ああ……腰が、痛いわ」

体をきしませる痛みは、彼女にとって日常の一部だ。

腰から、肩から、膝から訴えかけてくる鈍痛が少しずつ思考を奪い、体を衰えに導き、魂をしなびさせる。この痛みが人を成長させることはない。常にある痛みはもはや体の一部だ。

成長することなく、維持することにいそしんで、それでも徐々に朽ちていく。

十年來の機会を、逸してしまった。

だが、大丈夫。

「また十年、待てばいいだけの話よ」

自分の寿命は、十分だ。

オーウェルは大きなフラスコを思い出す。

若い女性で生贄を蓄え、素材も万全だ。魂の補強はできている。肉体の老いは止められずとも、寿命を延ばすことはできている。東部未開拓領域の『絡繰り世』との取引も順調だ。グリザリカ王家の本丸とも密約を交わした。

「これからよ」

新たな人生を、手に入れるのだ。

「私は、まだ、これから。あなたのように、なるのよ」

呟きながら顔を上げたオーウェルが視線を向けたのは、西だ。

大陸の西には、聖地がある。

「ねえ、そうでしょう……エルカミ」

どうしようもなく老い続ける彼女は、自分が禁忌に堕ちるきっかけとなった、聖地を守護する大司教の名を呟いた。

空が、白みはじめていた。

メノウたちは薄暗い地下から日の当たる表通りに出ていた。

妖精はメノウとモモの連携攻撃で撃破した。そのままひとけのない裏通りにつながる出入り口を通過して、アーシュナともども地上まで逃げ切ることができた。

追っ手の気配はまだない。ここからの逃げ道は二つだ。

グリザリカ国内の他の町に移動するか、国境を出て未開拓領域に出るか。

グリザリカ王国の国境を出れば、荒涼たる大地が広がっている。かつて地脈の暴走

現象『竜害』が起こったことで文字通り削られてしまった不毛の大地だ。

「殿下。私たちは、これからすぐにガルムから未開拓領域に出ます」

「そうか」

メノウが自分の選択を告げたのは、アーシュナだ。地上に出るまでに自分で歩ける程度には回復していた。

「殿下はどうしますか」

「オーウェルは、異世界人召喚の責をすべて父上に押し付けた」

「……はい」

「ま、それはいい。そそのかされた父上が愚かだった。敵は狡猾にして、強大だ」
さっぱりとした口調に怨恨の色はない。身内への親愛の情が薄いのか、それとも人を恨まない彼女の気質ゆえか。メノウたちの正体をうすうす悟っているだろうに、追及することもない。

アーシュナは、まっすぐに前を向く。

「私は王城に戻る」

「一度、国を出るという選択肢もあります」

「ないな。戦わねばならん相手が増えた。私が国を出て逃げることはできん」

アーシュナは、きっぱりと言い切った。

確かに世直し姫と言われたアーシュナの名声ならば、オーウェルの対抗馬となりうる。若い世代だけを見れば、アーシュナの人気のほうが高いのだ。

それでも、勝算は低い。

敗色濃厚なからも戦うことを決めた彼女には、これから多くの困難が待ち受けているだろう。

「君の力が欲しい」

アーシュナが真正面から手を伸ばす。

まっすぐ目を見て、後ろ暗さが透けて見えるメノウの経歴を気にも留めずにてらいもなく能力を求める。影の世界で生きてきたメノウにとっては輝かしい魅力的な言葉だった。

だが、その手を取るわけにはいかない。

「協力は、してくれないか？」

「……残念ながら」

逡巡しつつも、首を振る。

メノウがここに残って、アーシュナの力になるのも一つの道だろう。禁忌に堕ちたオーウェルは巨悪だ。国家権力に等しい力を振るえる立場にいる彼女には、グリザリカ王家の一員とはいえアーシュナ一人の力ではあらいようもない。

だがメノウがアーシュナに協力した場合、アカリをどうするのだという問題が残る。オーウェルがアカリを狙っていることは明白だ。メノウにとってアカリはいずれ殺さねばならぬ相手だが、オーウェルに利用されるわけにもいかない。アカリの魔の手から守りつつ、アーシュナに協力しなければならない。

グリザリカに滞在させたままアカリが純粹概念を暴走させれば、最悪の結果しか生まない。

そしてメノウは処刑人だった。

だからアーシュナとは別の道を選ぶ。

「必ず、オーウェル猊下の悪事は、他国の^{ファウスト}第一身分に届けます。事の大きさからすれば、聖地が直々に対処してくれる可能性も高い事件ですから」

「我が国の強さからして、他国はあまりあてにできんな。もし聖地が動くとしたら、どのくらい時間がかかる？」

「聖地からの助力は……おそらく、三か月ほど後になります」

「……長いな」

アーシュナが苦笑する。

しかし、どうしようもない。国と国の間は未開拓領域を挟んでいるため、どうしても時間はかかってしまう。しかも西の聖地と東のグリザリカは、地理的にもっとも離れているといってもいい。

「殿下は期待できないとおっしゃいましたが、私がリベールに着けば、その時点で多少の支援は望めるはずです。あそこはもうグリザリカ王国とは違う国ですから、^{フアウスト}第一身分もオーウェル大司教とは管轄が違います」

「そうだな。期待しないで待てよう。これから、ますます国境の監視の目はきつくなる。孤立無援になる身としては、援軍のあてができるのは心強い」

アーシュナは踵を返す。

一人であっても堂々たる背中に、声をかける。

「ご健勝で、殿下！」

「ああ」

アーシュナはさっそうと片手を上げて応える。

「さらばだ、神官殿」

短く別れを告げたアーシュナの勝ち目は薄いだろう。

だが、彼女の背中は、どんな逆境もはねのけられそうなちからに満ちていた。

「……」

メノウは、歩き出した。

長い夜が明け、朝日が顔を出す。

メノウにも、まだ一仕事、残っている。

オーウェルには騙されていた。このガラムに、アカリを殺させる儀式場なんてものは存在しなかった。オーウェルはアカリの純粹概念を利用しようとしているのだ。

【時】の純粹概念で自分の死を【回帰】させて復活するアカリを殺す手段は、メノウ自身が探さねばならない。

アカリを殺し、^{ヒューマン・エラー}人災を未然に防ぐために、まずはオーウェルの手から一緒に逃れる必要がある。

殺すために、守らなければならない。

そんな矛盾を抱える行為が、どんな感情を呼び戻すかも知らず、メノウは宿へと急いだ。

明らかに地震ではない変な地響きと外の喧騒のせいで、寝ることができなかった。

「んんぁ……」

ごろん、と寝返りを打ちながらも、やはり眠気は訪れない。もう朝だというのにメノウがいないのも変だ。なにか、よくない事態に巻き込まれているのではと、アカリの心がそわそわする。ここに一人残されたらどうしようという不安が首をもたげる。

だが、なにか行動に起こせる根拠も勇気の力もない。

どうしよう、と思考をぐるぐるさせることしかアカリにはできなかった。

「メノウさん……どうしたんだろう」

アカリはここまで自分を連れてきた少女の顔を思い出す。

「似てる、よね。やっぱり」

この世界に来て出会った少女、メノウ。

髪の色は違う。瞳の色も、服装だって彼女はあんな恰好をしたことなどなかっただろう。

だが、あの綺麗な顔。彼女はアカリが日本にいた時の自分の――

「アカリ！」

「ふえ!？」

びくっとして思考を止める。

「め、メノウさん？おはようございます」

「おはよう、アカリ。よかった。起きてたのね」

つかつかと部屋に入ってきたメノウが、あわただしく出立の準備を始める。急な話
にアカリは目を丸くする。

「急で悪いけれども、すぐに出るわよ」

「え？え？あの、大司教って人に、日本に帰してもらえるんじゃ……」

「ごめんなさい、あなたを日本に帰せるって話だったんだけど……無理そうなの」

「へ？」

「詳しい話は省くけど、騙されていたわ。大司教は、とんでもない悪人だった」

突然の話に、ぽかんとアカリの口が間抜けに開く。

「そう、なの？」

「ええ」

メノウが沈痛な顔で頷く。

「あなたを喚び出した^{ノブレス}第二身分たちも、オーウェル大司教が裏で糸を引いていた。
黒幕だった彼女に捕まったらなにをされるかわからないわ」

「そ、そうなんだ」

合ったこともない偉い人が黒幕でしたなんていわれても、アカリに実感は皆無だった。
急展開に戸惑いを隠せない。

あまりにも話が変わりすぎている。自分を日本に帰すための儀式場とやらがあると

いう話から、一気に逃亡の旅をしなくてはならないという。話の急転ぶりにすぐに納得するほうが難しい。

「すぐに脱出しなきゃいけないわ。ロクな用意もしてないから、少し過酷な旅にするかもしれないけれども、お願い、アカリ。一緒に来て」

「……………」

即答はできなかった。

そもそもアカリは、メノウのことを信賴しているわけではない。王城から連れ出された時も、押し切られてしまったというのが正しい。

「……うん、わかった」

怪しい。納得できない。つらい旅なんて嫌だ。

拒否する言葉はいくらでも出ただろうが、それでもアカリが頷いたのは、この世界ではメノウ以外に頼れる人間がいないという理由と、もう一つ。

彼女のことを、知りたい。

いつの間にか、その欲求がメノウと一緒にいる理由になるくらいには膨れていた。

だって彼女の顔は、姿は、あまりにも——あの子に、似ていたから。

そのために、一步、踏み込む。

「わ、わかった……ええっと」

この人は、あの子とは違う。

それを自覚する。別人なのだから、最初からきちんと始めなければならない。

この子は日本の教室でいつも一緒にいたクラスメイトではないのだ。

「メノウ、ちゃん」

勇気を振り絞って一步だけ距離を詰めたアカリに、メノウは驚いたように目を見張って微笑む。

メノウが差し出した手を、今度は迷うことなく掴むことができた。

「ええ、アカリ」

これは、アカリにとって最初の一步。

生きるための旅路ではなく、赤黒い死が待ち受ける、まっさらな道。繰り返した時間の履歴の始まりにして、ここにいる二人の少女が友達になるだけの旅だ。

「一緒に行きましょう」

まだ二人が繰り返す前の最初の旅が、始まった。